



佐藤優人さん(営業・広報部 統括)／余目町(現:庄内町)出身。庄内を出たい一心で必死に勉強し、鶴岡南高校卒業後に早稲田大学に進学。東京では、トークイベントの企画や放送作家の仕事もこなしていた。その経験を活かし、Uターン後はさまざまなイベントを企画し、地元若者向けに庄内の魅力を発信している。

SUGOI REPORT
スゴ★レポ

高校生編集部が
 地元企業の魅力発見!

Cradle
 高校生編集部が行く
スゴハイ 特別編
 SUGOI highschool students in Shonai

Supported by
 庄内広域行政組合、山形県庄内総合支庁

米どころのポテンシャルを最大限に引き出す企画力と、的確に課題解決する機械を生み出す設計力。庄内には、独自の武器を手に全国全世界を舞台に活躍する企業があります。

人とのつながりを感じ
 喜べるのが、私たちの農業

「庄内のおいしい米を、日本中、世界中に広めたい」と営業・広報担当の佐藤優人さんは語る。有限会社米シスト庄内の事業は大きく二つ。一つは、米の生産と販売。約100ヘクタールの田んぼで生産した庄内米を、国内だけでなく海外にも販売している。東日本大震災の後、風評被害の影響もありしばらく海外への販売をストップしていたが、昨年から少しずつ再開し、現在は中国やヨーロッパなどへ販売している。

二つ目は、自社米を使った加工品の製造と販売。商品はすべて、庄内米のおいしさを味わってもらうことを第一につくられている。例えば「すっぴん煎」。焼いたり揚げたりせず、玄米をはじけさせ



「かりんと百米」と「すっぴん煎」。どちらも庄内米のおいしさがぎゅっと詰まっている。

て煎餅にしているため、お湯をかければおかゆとしても食べる事ができるそうだ。

「かりんと百米」は、味つけの原料を除けば庄内米100%のかりんとう。実は、日本で唯一の「小麦粉をまったく使っていないかりんとう」でもある。「小麦粉でつくられている食品は、すべて米粉

販売されている。「百米をつくってよかったのは、たくさんの人とつながれたこと。初対面でも名刺を見て『あのかりんとうの?』と言ってくれる人に、いろんな場所で何度も出会いました。ちよっと不思議な感じがしますが、本当に嬉しいことですよ。」

東京暮らしを経て、庄内に帰ってくることを選んだ佐藤さん。地元の高校生にどのような想いを抱いているのだろうか。「僕、『キモい』って言葉が大っ嫌いなんですよ。自分の考え方や好みと合わない人をわかってとせずつ拒絶するのって、格好悪いじゃないですか。さまざまな人や考え方に寛容になり、高校生のうちに親や先生以外の社会人とたくさん仲良くなってほしいです。僕もいろんな人とのつながりに救われてきましたから。終止笑いを誘う軽妙な語りの中で、佐藤さんの言葉にぐっと力が込められた瞬間だった。



有限会社
 米シスト庄内
 住／東田川郡庄内町久田字寺前8-1
 電／0234-42-1181
 HP／http://www.beisist.co.jp



重たそう...
 施設内の説明をしていただきました。



7種類の味を
 ラインナップ!



「こっぴが田んぼです。」
 「鮮やか!」



佐藤さんのお話はみんなを笑顔にします。

現在「かりんと百米」は、庄内地方はもちろん、東京スカイツリーやナチュラルローソンなど、首都圏をはじめとした全国各地で

「徹底的にリサーチするため、すべての製造元に電話をかけました。結果、米粉100%のものはゼロ。これはやるしかないなと思いました。」

で代替可能だと考え、思いつくだけ小麦粉の食品を挙げてみることに始めました」と開発の経緯について話す佐藤さん。米粉への代替が進む商品が少なくない中、米粉を使ったかりんとうはそれほど多くはなく、当時全国で60商品ほどしかつくられていなかったという。「徹底的にリサーチするため、すべての製造元に電話をかけました。結果、米粉100%のものはゼロ。これはやるしかないなと思いました。」



脱線しながらもきちんと本筋に戻ってくるトークの上手さは、放送作家時代の賜物?

課題を解決してこそその機械、それを生み出すのが設計力

酒田の地で、産業機械設備を中心とした多分野の機械開発を手がける阿部エンジニアリング株式会社。「設計力こそが我が社の基本」の理念のもと培ってきた技術で、設計から製造、据付け、メンテナンスまでの全工程を自社で行い、お客さま一人一人に合わせたオリジナルの機械設備を全国の企業に提供している。

社長の阿部敏昭さんは、酒田工業高校卒業後、「4年間修業のつもりで酒田から出よう」と、名古屋の会社で就職した。そして4年後、昭和44年3月に故郷の酒田に戻り、22歳の若さで会社を立ち上げた。「約束された収入がなくなるかと思うと、全身に鳥肌が立ちました」と当時を振り返る阿部さん。最初の仕事は、ある新聞記事を目にしたことから始まったという。「農機具の製作所で、従業員の体調不良が起きている」という記事だ。阿部さんはその会社に向いて問題を解決。これをきっかけに他の企業からも仕事の依頼が



さまざまな分野の製品を、楽しそうに紹介してくださる阿部さん。

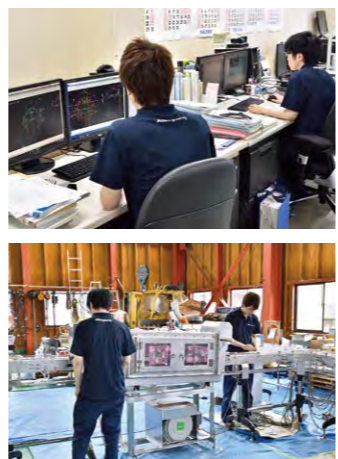
舞い込み始めた。このように、課題を見つけて解決する仕事を次々とこなしていった結果、お客さまに合わせた機械を製造する現在のスタイルが生まれたのだ。

阿部エンジニアリングは、ものづくりの主役である社員の育成にも力を入れている。設計は設計、製造は製造と一人一人の仕事を限定する「二刀流」ではなく、「二刀



阿部敏昭さん(代表取締役)／酒田市出身。家業が漁業で幼い頃からずっと船が好きだったが、父親が乗っていた漁船のディーゼルエンジンを見たことがきっかけで機械に興味を持ち、エンジニアを志す。創業以来、見聞きして印象に残ったことを「阿部辞典」として綴り、さまざまな分野の課題を見抜く目を磨いている。

(上段左から)
阿部敏昭さん
阿部充志さん
(下段左から)
瀬川恭平さん(鶴岡工業高校出身)
佐藤佑斗さん(酒田南高校出身)
田宮拓也さん(酒田工業高校出身)



設計部隊(写真:上)が引いた図面をもとに、歩いて数分の自社工場で行う(写真:下)。

流」「三刀流」を目指し、幅広く多様な技術を修得させることで、社員のスキルアップを図っている。これは、全工程が自社内で完結しているからこそできることである。また、すべてをコンピュータ任せにせず、人が考えて行うべき部分を手作業にすることで、独自の高品質を保っている。

「今後どのような企業にしていきたいか」という問いに阿部さんは笑顔でこう語る。「この仕事なのに私の人生はありませぬ。興味で挑戦したいことを辞めるほどではありません。生イコール仕事」。『いい人生送りたい自分も社員もできるような完全燃焼を自分で社員もできるような会社にしていきたいですね』。

最後に若手社員の方々に、高校生へメッセージをいただいた。「誰かに言われたから」ではなく、自分が何をやりたいかを考える

て進路を決めてほしいですね(設計課・田宮さん)。「いろいろなものがつくれる会社だから、大変なこともあるけどとても楽しいです(製造部・佐藤さん)」「とにかく機械をいじりたい人におすすめの会社です(設計課・瀬川さん)」。本気のものづくりで生きていきたい若者を、阿部エンジニアリングは待っている。



編集後記

2度目の鶴北高新聞部編集「スゴハイ」の取材、記事の執筆をしたが、部員全員で協力し、他の担当記事もある中、無事書き上げられた。前回と違い、企業に訪問して大人の方の話も興味深く聞くことができ、私たち高校生とは違った視点からの話が聞けて、将来に対する見方を広めることができた。企業で働いている方の生の声を聞くことはあまりないので、貴重な経験ができて本当に良かったと思う。(まなつ)

今回が、2回目の「スゴハイ」だったが、前回とはまた違った貴重な体験ができた。今回のテーマが「企業」ということで、実際に仕事現場を見たり、社長や社員の方にお話を聞いたりして、自分自身の今後の人生についても考えさせられた。「進路選択」については、高校生の誰もが通る道なので、Cradleの高校生編集部として、「進路」に関連した記事を書くことができてよかった。(ほのか)

編集部員&特ダネ まだまだ募集中!

鶴北高新聞部と一緒に「スゴハイ」の企画制作をやりたい高校生、「こんなスゴい高校生知ってる」「私、スゴいんです」などスゴい高校生の情報は随時募集中です。お気軽にご連絡ください。

ご応募・お問い合わせ先
Cradle事務局
info@cradle-ds.jp



阿部エンジニアリング株式会社

住／酒田市北浜町2-54
電／0234-35-1250
HP／http://abe-eng.co.jp

編集・文=Cradle高校生編集部、工藤 拓也
写真=間 真由美
協力=鶴岡北高等学校